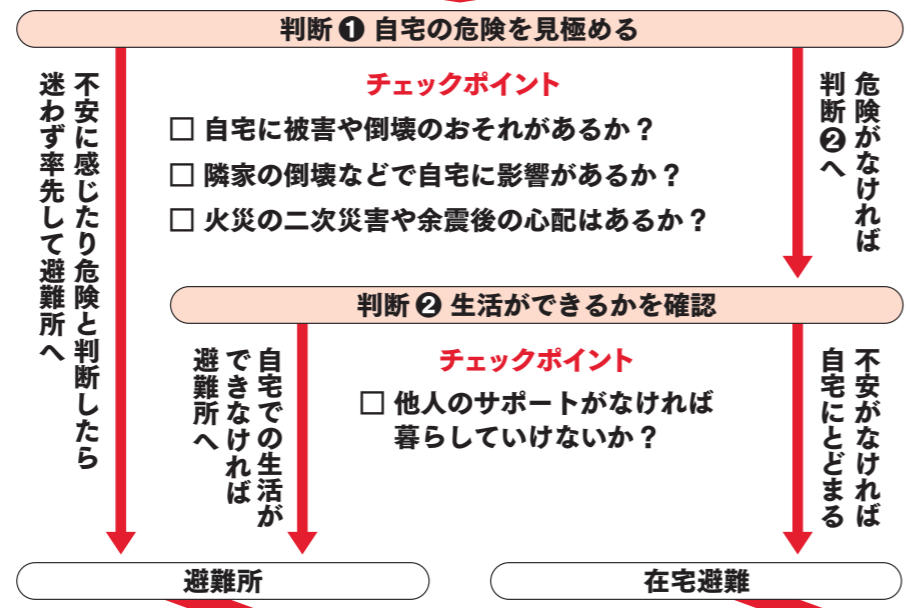


# 福智山断層帯地震 福智町内の被害想定

- 発災当日避難者数 ▶ 約1200人
- 1週間後避難者数 ▶ 約1400人
- 1箇月後避難者数 ▶ 約1400人
- 断水人口(直後) ▶ 約6500人
- 停電件数 ▶ 約60件
- ガス漏洩被害件数 ▶ 約100件
- 道路の被害箇所数 ▶ 約20箇所
- 帰宅困難者数 ▶ 約1500人
- 居住制約世帯数 ▶ 約2900世帯
- 食料・飲料水制約世帯数 ▶ 約2800世帯
- 通信(携帯)停波基地局率 ▶ 約1%

## 2段階で避難を判断



↑ブレーカーを落とし、ガス・水道の元を閉めて避難。



↑車両移動が不可能になった熊本地震の道路崩壊。

## 避難所へ

危険だと判断したら、  
ためらわず、迷わず、  
命を守るため避難所へ。

## 在宅避難

自宅に危険がないなら、  
最も身近な場に身を置く。  
命を守る備えを習慣に。

## 「在宅避難」か「避難所」か

# 判断基準は常に「身の安全」

地震後に自宅や周囲に危険がなければ、次は「自宅で生活が続けられるか」を判断。その後の余震の影響も想定し、不安を感じたり危険と判断したら避難所への避難を決断しましょう。

## 「難」を「逃」れる選択を

避難所の受け入れは、自宅が全半壊するなど、在宅避難が不可能な人が優先されます。地震後に耐震性の自宅が無事なら、そのまま自宅で生活する「在宅避難」の選択が有力になります。「在宅避難」では「プライバシーが守られる」「自分に合った寒さ・暑さ対策」

「幼い子どもなど個別ニーズへの対応」「ペットと一緒に」「空き巣被害」などの課題に対するメリットがあります。

避難先の判断は人任せにせず、行政情報や自分の目で確かめた状況を基に判断してください。また、被災していない遠方への避難も選択肢の一つです。支援物資は、状況が落ち着けば避難所で受け取ることができます。



↑熊本地震で避難所に集められた支援物資の配給



↑熊本地震の直後、店舗で空になった食料品の棚。



↑地震直後に水道水が出るなら断水の前に確保を。

## 備えたい「持出品」リスト

- 水／非常食／モバイルバッテリー／常備薬／救急用品／お薬手帳／マスク／消毒／ラジオ／懐中電灯／電池／衣類下着／タオル／スリッパ／ティッシュ／ウェットティッシュ／ポリ袋／洗面用具／ハンカチ／現金／軍手／カイロ／ライター／はさみ／方位磁石／雨具など



↑避難時にすぐ持ち出せる「防災リュック」の準備を。

## 「防災リュック」を備える

避難を想定し、背負って両手が使える「防災リュック」を準備しましょう。当面必要となる最小限の物を中に納めます。玄関近くにあれば、いざという時に素早く持ち出せます。乳幼児、高齢者、女性、アレルギーなど個別の状況に合わせ、必要な物を追加して備えましょう。

## 「備蓄サイクル」で備える

ライフラインが被害を受けると、復旧までの間、電気・ガス・水道が使えなくなります。そこで、食料品や生活必需品を日頃から多めに備え、消費分を買い足していく日常備蓄「ローリングストック」が有効です。最低でも3日分、できれば1週間分備えておきましょう。



↑日常利用の食料や生活必需品を少し多めに購入。

## 備えたい「備蓄品」リスト

- 飲料水(1人1日3ℓが目安)／コンロ・ガスボンベ／ポータブル電源／米／保存食／医療品・常備薬／衛生用品／ラジオ(ソーラー発電)／懐中電灯／簡易トイレ／ビニール袋／ポリ袋／ラップ／トイレットペーパー／ティッシュ／クーラーボックス・保冷剤／新聞紙など

## 最悪を想定内に

**震** 度7の揺れは破壊的で、死を感じました。当時私は役場の管理職。道路も寸断され、自己判断で避難所運営に当たりました。学校には重症者も含め50人以上が避難し、職員は5人。救急車は来ない。「飯は」「水は」と詰め寄られる。パニック状態の中、「役場は当てにしないで、私たちが生き抜きましょう」と呼びかけ、各家庭の備蓄品を持ち寄り、支援物資が届くまで生き抜きました。被災地では「まさか」と人々が口にします。しかしその「まさか」を「もしも」で考えてほしいのです。地震と豪雨が重なったらどうなるか。私は今でも最悪を想定しています。



熊本地震「奇跡の避難所」を当時西原村で運営した  
熊本市西原村議会議員  
堀田直孝さん



↑熊本地震で余震を警戒しながらの屋外炊き出し。